

小論

損益計算書と貸借対照表での 「成長（繁栄）」の定義の違い

損益計算書における成長は「収益・費用・利益」の前年と比較してのすべての増加と定義する。利益さえ出ていれば成長だとは考えない。社会の一般的見方では「減益」は衰退と考える。Up Down 方式経営分析でも損益分析では同様の評価としている。つまり「利益」が前年より増加した場合に成長としている。もちろん新しい考え方で二項目同時増加を成長としている。

次に貸借対照表であるが、総資産（会社規模、経営の手段などとも言える）の増大が成長と言ってよい。ここでも Up Down 経営分析では総資産単独ではなく資本（純資産）の増加とあわせて二項目とし、両者の同時増加をもって成長としている。比較基準は前期末（期首）と当期末（期末）の比較である。

ところで総資産の増加には三つの要因がある。1つは借入の増加に代表される「負債の増加」によって総資産は増加する。さらに純資産を構成する「資本金の増加」つまり増資によっても増加する。そしてもう一つ純資産を構成する、最も重要な「経営活動において発生する利益」によって増加する。利益計上だけではなく「借入と増資」によっても総資産は増加するのである。

損益計算書では「利益の増加」を成長要素とし、貸借対照表では「利益そのもの」を成長要素としているのである。

損益計算書では「売上・費用・利益」の三つ巴の増加を、貸借対照表では「総資産・借入などの負債・純資産（資本金と利益剰余金）」の三つ巴の増加を成長としている。

専門知識になるが【「利益剰余金の増加」＝「利益そのもの」】なのである。

⑩配当を考慮しなければ

なお「貸借対照表は歴史書である」との定義はこのホームページの別のところで述べている。

損益計算書分析では「利益の増減」を成長や景気判断の基軸とし、貸借対照表では「総資産の増減」を成長や景気判断の基軸としていることになる。

損益計算書では前期と今期の利益の出方の増減比較であり、貸借対照表では前期末（期首）と当期末（期末）の残高の増減比較である。